

総科オリキヤンのゆくえ



《日程》

■1日目

9:30 広大出発
11:00 野外活動センター到着
30 開村式
12:00 昼食
13:00 教官共同企画
15:00 夕食
19:00 キャンプファイヤー
22:30 就寝

■2日目

6:30 起床
7:00 朝食
9:30 オリエンテーリング
12:00 昼食
13:00 フェロー企画
14:30 閉村式
15:30 野外活動センター出発
17:00 到着・解散



《各企画の内容》

教官共同企画

教官と新入生の親睦を図る企画。運動会とディスカッションからなり、後半のディスカッションでは各グループ毎にある問題について議論する。教官からは物足りないとの声も。

キャンプファイア

キャンプの定番企画。定番のフォークダンスもやるが、いろんなゲームやこの日のために練習したファイアダンスなどもある。ミニファイアではフェローがトーチを掲げて感動を表現し、班ごとに輪になっているんな事を話し合う。

オリエンテーリング

これも合宿などでは定番。それだけに成功度は高く、教官にとってもいい汗を流せる企画である。得点がお金と単位で表されるためか、せつかくの景色を楽しむ余裕もない(?)のが玉に傷。

フェロー企画

その名も“The way to Las Vegas”という。フェローが実際に演技を行いながらの間違ひ探しや、食べ物の中からはし入りが混じっており、それを食べると点数が入るまじいもの食い、1年生が出走して班員が賭をするレース等が内容。

《各部署の役割》

フェロー

他のスタッフとは違い、フェローの仕事は1年生に直接向かい合う事である。今年のフェロー自身の定義によれば、整列させて点呼を取るなど班をまとめる事もそうだが、全ての企画に1年生が積極的に参加できるような橋渡しをする事、そして入学したばかりの1年生の緊張を解きほぐす事などが彼らの役割である。また、フェロー以外のスタッフと班員同士がフェロー抜きでも仲良くなれるよう、フェローによる企画も受け持っている。

生活

主として当日の食事や宿泊等にまつわる部分を担当する。食事の材料や弁当の発注・受取・配布、物品調達、ゴミ箱の設置と回収・焼却等、キャンプ直前から当日にかけて仕事が多い。そのため毎年スタッフ募集前に「楽だ」といううわさが流れるが、当日に考えが甘かった事を思い知らされるようだ。また、生活には企画補助という部署もあって企画の手が足りないときに応援に回る事になっている。

F F

Fellow of Fellows の略らしい。去年のフェロー経験者が今年のフェローに対して「いろいろと」指導を行うのが目的のようだ。

企画

キャンプで行われる「出し物」を企画し、進行する。企画の大枠は前年度を踏襲している場合が多いが、内容のかなりの部分は一から作り上げていく必要があるため、準備が大変な反面やり遂げたときの達成感は大い。企画という部署の中も各企画ごとに担当分けがなされており、その中でさらに担当分けがなされている場合もある。なお、企画の手が足りないときには、生活の企画補助の応援を受ける体制になっている。

広報

キャンプに関する広報活動を担当する。スタッフ名簿に始まってリハール用、本番用、1年生用のマニュアル、班やフェローの紹介等の編集・出版・配布が仕事である。当日は教護と誘導を担当している。

執行部

主に3年生から成り、学部との折衝や全体の統括を受け持つ。部署別会議中は各部署についてアドバイザー的な役割を果たしていた。

会計

各部署に会計の係があり、執行部の会計で全ての出納が管理されている。

●オリキャンに参加して・・・

林 光緒 (生体行動科学コース講師)

教官という立場で初めてオリキャンに参加しました。年齢差もあるのですが、やはり学生とは立場が異なるので、多少の違和感があったことは否めません。それは置いておくとして、今回、参加して感じたことを少し述べたいと思います。

昨年度の飛翔に、オリキャンに関する記事が掲載され、様々な問題点が指摘されていました。その中には、歓迎する側の2年生以上の意見ばかりが目立ち、歓迎された側の1年生の意見はほとんどなかったように思います。

私が学生の時、新歓行事に関して上級生から教えられたことがあります。それは、「お客様を作らない」ということです。その時間、その場所を共有して、一緒になって共通体験を作り出す、ということが大切なことであっ



て、歓迎する側が上げ膳、掘え膳でなくても世話をすることが新歓ではない、ということです。こういう「お客様」が、残念ながら今回のオリキャンには多かったように思います。フェローが一生懸命、ご飯の支度をしている最中に、1年生が何をしていたのかかわからず、うろろろしていたり、雑談している1年生のそばでフェローが一生懸命ごみ拾いをしたり、食器を洗っていたり、あるいは、フェローがどこかへ行ってしまって、班員がバラバラになっていたりと、いろいろな場面を何度もなく見かけました。「1年生と一緒に何かをする」というよりも、「1年生に何かをしてあげる」という気持ちの方が強かったのでしょうか。でもそれは、結果的に、「お客様」を作ってしまったことにはならなかったでしょうか。

かつて、「お客様」を1人でも作ってしまったら新歓は失敗だ、と上級生から強く言われたことを思い出します。自ら「お客様」になってしまった私には、このようなことを言う資格はないかもしれませんが。

ただ、閉会后、1年生を放ったらかしにしておいて2、3年生だけが写真撮影をしていることには、少し憤慨しました。一体、何のためのオリキャンなのだろうか。

●オリキャンを終えて

加治木 良郎 (1年)

広大生となって初めての大きな行事「オリエンテーションキャンプ」が終わって約1ヶ月がたった。1ヶ月たった今、オリキャンで味わった広大生の雰囲気、特に総科生の雰囲気が体にしみついてきているのが自分でもよくわかる。

入学式、チューターごとのクラス分け、オリキャンの班分け、花見、新歓パーティーといろいろな行事があったが、僕ら新入生は全てを緊張と不安の中から入っていった。最初は正直言って出席するのを躊躇しようかと思うくらい、あの激しい雰囲気が不安だった。しかし、班ごとのいろいろな行動、またフェロー、スタッフの皆さんの並々ならぬ努力によって僕らはいつの間にかその雰囲気を心地よく思うくらい成長(?)した。それまで、いろいろな行事に参加する前には常に不安に思っていた自分が、オリキャンに関しては前日からずっと楽しみにしていたのはその成長の明かしであり、フェロー、スタッフの方々

のおかげであると思う。

実際、オリキャンは僕らの期待以上に楽しいものだった。ただ騒ぐだけではなく、いろいろな人との関係を通じて僕らが得たものは、今まで得たものとはまた違う貴重なものだったと思う。

これは僕個人の意見だが、このオリキャンを通じて一番嬉しかったことは自分で自分を他人に打ち明ける事ができたという事である。それによって他人と通じ合うことができたというのもさらなる収穫であった。

最後に、このオリキャン、そして不安定状態であった僕らを暖かい力で支えてくれたフェロー、スタッフの皆さんに感謝の気持ちを述べたい。僕らのために長い時間をかけて、またいろいろなものを犠牲にしてまでオリキャンを実行し、成功に導いた皆さんに言葉では表しきれないのだけれど、とりあえず感謝の気持ちを込めて一言「ご苦勞様でした」と言って終わりたいと思う。

●オリエンテーション・キャンプを終えて

河村 まみ子 (外国語コース2年)

4月29・30日という2日間のキャンプは1年の秋からすでに始まっていました。キャンプは全てが0からの出発でした。ひとつのことを決めていくのに、いかに0生が楽しめるか、話ができるか、など何度も何度も時間をかけて話しあいました。

私はフェローという仕事を選びました。班のまとめ役、または1年生との潤滑油というような役であるフェローは、いろいろとたいへんでした。キャンプへの勧誘や、花見や、新歓パーティーでも、1年生と仲良くなるため、必死にがんばっていたと思います。キャンプの2日間も含め、1年生が入ってから1カ月とその前の6カ月間、その間がオリキャンであり、楽しいことばかりではなく、しんどく、たいへんでしたが、充実はしていました。

キャンプ自体のことは、反省点も多く、スタッフ同志の一体感を得ることも100名を越す数では難しいことだったと思います。しかし、それだけの数がひとつになり、キャンプをつくり、やり終えることは、本当に感動もしましたし、いろんな人と出会い、仲良くなって、自分の成長にもつながったと思います。



●重荷をおろして

佐野 隆幸 (地域文化コース3年)

「新入生、在校生スタッフ、教職員の親睦を深め、総合科学部としての一体感を求める」という目的で行ってきた'96オリエンテーションキャンプ。大きな事故もなく、今年も無事終えることができました。また、180人も新入生に参加して頂けて、運営スタッフとしてはうれしい限りでした。

キャンプの内容としては、ミニ運動会に教官方とのディスカッション、キャンプファイヤー、オリエンタリング、フェロー企画と、例年通りの内容ではありませんでしたが、新入生には大学生活のスタートにあたって、いちはやくこの総合科学部にとけ込むための、いい機会になったのではないかと思います。

また当然のことではありますが、今年もうまくいかなかった点、新たに気づいた点などたくさんの方の反省ができました。これらの反省が

来年に生かされるようにと、今年はすでに来年度に向けて、準備委員会をスタートさせて、話し合いを始めています。総合科学部のオリエンテーションキャンプは、他学部のオリエンテーションキャンプと比べて、スタッフの参加数が多いという特徴があります。スタッフの参加数が多いということは、新入生にとって多くの先輩と知り合えるという点で大きなメリットがあると思います。しかしただ多いと言うだけでは意味がありません。キャンプのスタッフをする目的で集まっているのですから、ただ参加するだけでは困るのです。新入生のために、新入生が大学生活にはやくとけこめるように、そしてスタッフをすることによって何かを得る(人の世話ができる、1つのイベントをつくることの難しさやその達成感を知るなど)というような明確な目的をもって、スタッフになって頂きたいと思っています。

来年で5回目を迎える総合科学部オリエンテーションキャンプ。よりオリエンテーション性の強いものにしていく為に、今一度スタッフ一人一人が、オリエンテーションとは何かということを考えていく必要があると思います。そして全ての参加者に納得して頂けるようなオリエンテーションキャンプを目指して頂きたいと思っています。



オリキャンよ、どこへ行く？

毎年キャンプ終了後、教官から批判の声が上がる。これまで表に出てこなかったこれらの意見を拾い上げるべく、数人の教官に取材を行った。また、07生スタッフの中にオリキャンについて話し合っている人々があり、彼ら自身による話し合いや、彼らと08生や学部長との話し合いも取材した。これらの取材の結果を踏まえ、オリエンテーションキャンプが現在抱える問題を少しながら考えてみたい。

問題1：相互連絡不徹底

「行事と行事の間の引き継ぎができておらず、スタッフが次に何をするのかかわかっていない」という教官の意見があった。

複数のスタッフに話を聞くと、どうやら部署間、フェロー=スタッフ間、07生=06生間はおろか、部署内でさえ意志疎通が不十分だったようだ。ある部署では「最初の頃の話し合いでは誰も意見を言わなかった」という。最初はみな経験がないからそれわかる。だが別の所では「友達同士で固まって世間話にな

り、仕事にならなかった」という。問題があってもなれ合いで「まあいいか」と流してしまう雰囲気が一部に存在したようだ。そういう部署は「後になってどんどん問題が現れても乗り越えられず、険悪な雰囲気になって行った」という。

スタッフの多くが「スタッフ同士で仲良くなれるのがキャンプのいいところ」と認識している。それを否定はしないが、創る楽しさはどこに行ってしまったのだろうか。

問題2：マンネリ化



キャンプの締めくくりに「キャンプは存続するものという前提に立っており、そこに安易さ、マンネリ化がないか」と学部長は講評した(総科 News Letter 第62号より)。スタッフの間にキャンプを自分達で創ろうという雰囲気はなく、惰性で続けているように見える、という事だ。

これについては、飛翔49号のスタッフ座談

会の記事も参考になる。「もっとよくして行く」というよりみんながなななあで、ぶつかり合って上を目指すより安住の地にとどまる、「自分たちで作り上げようという意識が足りない」。例年、4月に入る前はスタッフ会議の出席率が低い。こういった「誰か任せ」という雰囲気はどこにでもあるが、スタッフ内にも多く見られるようだ。

「マンネリ化と言われても、初めてスタッフをやる者には詳しい事はわからないし、それを乗り越えようと来年も参加して引っ張って行く07生はいない。今年スタッフをやった自分の時間がなくなるのが分かったから、オリキャンだけに時間を奪われたくない」とある07生は語る。スタッフの大多数にとって、募集時期は1年生の秋である。この時点でそれを理解しろ、というのは酷だ。しかし、2年生の秋に決心するものは少ない。

問題3：オリキャンの意義

学部長によれば、当初のオリキャンは「いろんな意味で不安がある新入生に、自分が大学に所属しているんだという意識をどういう形でもいいから早く持たせてやりたい」と訴え、04生中心の学生たちが自分たちで始めたようだ。だが、プログラムの枠だけが引き継

がれ、一つ一つのプログラムの意図や目的は失われているのが現状だ。

おそらく、創始者と二代目以降の意志や能力に違いがあるのだろう。能力については、「04生が優秀だった」という声もある。また意志が伴わないまま「続けなきゃ」と気

負いすぎた面があるのかもしれない。自分達にできる事を柔軟に考えられなかったか、伝統墨守派が主流を占めたか、あるいはその他の理由があったのか。詳しい事は分からない。

原点に立ち返って、オリキャンの意義を再定義してみよう。それは、総科への帰属意識を高め、学生生活に一定の方向付けを与える事である。具体的には、「不安を抱えた新入

生に、先輩が自分の生きざまを見せる中で、ここにいる事を誇りにしているということ伝える」(学部長談)ことになるようだ。しかし、「そんな大した生き方してない」と答える人がほとんどののかもしれない。一部教官が指摘したような「管理的で安易な感動ごっこ」へ流れてしまうのは、伝えるものがないためなのだろうか。

問題4：オリキャンの存続

5月22日、07生有志による「オリキャンを考える会」がスタートした。様々な問題が論じられていたが、その前に来年オリキャンを引き継ぐ07生がほとんどいないという事実が判明し、問題となっている。

7月5日に行われた学部長、コース委員長との会議では、現状を聞いた学部長が「そんな状態なら無理してやる必要はない」旨の発言をした。「学部としては大学教育のオリエンテーションをしてもらいたい(強制ではないが)」と思っているが、2年生のスタッフを中心に出来ないうら。歓迎行事なら出来るかも知れないが、それには教官は参加しないし、予算も出せない」と厳しい発言もあった。一方で「他にやりたい事があるなら、できる範囲でやればいい」となだめる発言もあった。いずれにせよ、腰の引けた印象の07生に、自分達で結論を出すべく考えて欲しいのだら

う。「学生が駄目なら教官中心でやる事も考慮する」という発言もあった。

07生が参加を渋る理由としても一つ考えられるのは「大勢の08生をまとめられるだろうか」という不安の存在である。今年の代表に言わせれば、「(僕も含めて)そんなのできる奴なんかおらん」のだが。



問題は山積している。まず、各学生に「総科で何を指すか」という目的が欠けているなら、オリエンテーションなどでできないだろう。ゆえに友達作りだけが主眼に置かれ、そういうオリキャンで育った1年生が翌年、更なる友達作りを目指して大挙スタッフになる。それがボロを生んでいるのだろう。半年間もスタッフをやれば仕事のつらさも身にしみ、引き継ごうという者もいなくなる。しかし、悪いのは決して07生だけではない。06生、05生、それ以上の責任も大きい。また、これを機会に教官の間でも議論が深まるのなら、それはそれで結構な事ではないかと思う。

「総科の学生には、知識だけではなく実践力をつけて欲しい。そういう能力が社会に出たときに求められる」と学部長は語った。学部の力を借りずに自分たちにできる事を探っていくのが本来の姿ではないだろうか。友達作りなら広大生協組織部の「Get-together」のような日帰りの行事でもできるだろう。今のオリキャンの形にこだわっていると、何も出来ないまま終わってしまうかも知れない。そうすると、09生はどこに居場所を見つけるのだろうか。総科の外に活躍の場を見つける人が増えるかも知れないが、どこにも居られない人は総科を去るのか、それとも・・・。

* * *

もっと取材をしているいろんな意見を拾いたかったが、筆者の能力がついて行かなかった。言いたい事があった方々には本当に申し訳ない。最後に、忙しい中時間を割いて本音のところを語ってくれた皆さんに感謝したい。読者の皆さんの考えに少しでも足しになれば幸いである。

(文責：渡辺忠信)

生物圏科学研究科10年の歩み

武森重樹 (広島大学名誉教授)

「総合科学部の自然科学系と生物生産学部を中心とし、理学部、工学部、医学部及びその他の研究所の協力を得て編成する第3の研究科を設ける」。——この構想に基づいて設置された生物圏科学研究科。その10年間の歴史をともに歩んだ筆者が、現在に至るまでの道程をここに証言する。



紹介することにしたい。

〈生物圏科学研究科の設置構想〉

広島大学の統合移転とそれに伴う改革整備計画については、昭和49年に飯島元学長と文部省との間で交わされた覚書が学内に公表されている。その中で最大の課題は大学院博士課程をどのように編成し、整備するかにあった。生物圏科学研究科の設立に大きな影響を与えたものは、昭和54年に竹山元学長が文部省へ提出した「広島大学大学院整備構想について」であり、自然科学系に関係あるところだけを要約すると次の通りである。

「自然科学系には、理学研究科と工学研究科の他に総合科学部の自然科学系と生物生産学部を中心とし、理学部、工学部、医学部及びその他の研究所の協力を得て編成する第3の研究科を設ける。」

即ち、他学部の協力が得られない限り、第3の研究科の設立は有り得ないことが明確に示されている。このような研究科を設立するための付帯条件は当時の学内の情勢下では大変厳しいものであり、後々まで博士課程の設置を遅らせる原因となった。

〈博士課程設置への長い道程〉

大学院博士課程の整備に関する事柄は全学

の大学院問題検討委員会で2年間にわたり討議され、生物圏科学研究科の基本構想案がまとまった。昭和55年頼実学長が就任された頃、この構想案が文部省へ提出される運びとなった。

この辺で大体の基本構想はまとまったが、学内協力の見通しが依然として立たず、更に3年近くにわたり足踏みの状態が続いた。しかし、当時総合科学部の学部長であった岡本哲彦先生のねばり強い対学部折衝によって、この問題に解決の兆しが見えはじめた。先生のご努力がなければ、博士課程の設置はさらに大幅に遅れたことが予想される。更に、全学の委員会の席上で津留歯学部長から「広島大学全体の研究教育の水準を高めるためには、すべての研究科が博士課程を持つことが必要です。皆さん協力しようじゃありませんか」という発言が飛び出すなど、生物圏科学研究科を設置するために、全学的にバックアップしようとする雰囲気が出始めてきたように記憶している。この間の我々の苛立ちの様子について、天野實先生は「広島大学の学部教育で、博士課程担当でないことでどんなにやさしい思いをしたことか筆舌に尽くしがたい」と記念冊子「10年の歩み」の中で述懐しておられる。当時、環境科学研究科修士課程を修了した学生を他の研究科の博士課程に進学させることが忍びず、他研究科の博士課程から籍借りをして自分の研究室で学生を指導された教官が少なくなかったかと記憶している。ここで改めて、初代研究科長を務められた今は亡き岡本先生に心から感謝の意を表したいと思う。このような苦難の末に、ようやく他学部の協力体制が確立され、その案を持って文部省へ説明に行かれた岡本先生から「博士課程の設置にゴウサインが出た」という第一報がもたらされた時は瞬間的に涙が出ていた。まさに価千金の涙と言っても過言ではない。

「博士課程の設置にゴウサインが出た」という第一報がもたらされた時は瞬間的に涙が出ていた。まさに価千金の涙と言っても過言ではない。

〈幻の改組案〉

生物圏科学研究科は昭和60年4月にめでたく発足した。しかし、発足当時の研究科は広島と福山に立地し、研究科の運営や授業の実施についていろいろと苦労した。現在では、西条新キャンパスへの統合移転によってこれらの難問題はすべて解消し、研究科としての一体感がより強くなったと思う。

研究科が発足してから6年ほど経過した平成3年の頃に研究科の整備充実を計るための動きが始められてきた。文部省が大学院の整備充実に関心をもち始めた頃で、広島大学もこれを受けて田中元学長から広島大学大学院の整備充実に関する基本方針が提示され、具体的な検討に入るための専門委員会とそれを総括的に討議する幹事会が発足した。その時、研究科長の角田俊平先生から、我々の研究科も改組に踏み切ってはどうかという提案があった。ご存じのように、研究科の学生定員は博士課程前期は61名、この内訳は両学部の研究科修士課程定員を合わせた数である。後期は学内の博士課程定員から拠出された僅か12名の定員という窮乏な状態で発足して今日に至っている。しかし、現在では入学者数は前期、後期ともにそれぞれ定員数の約2倍近くに達している。また、外国人留学生も多数を数えるに至っている。そこで、新入学生定員を博士課程前期120名、後期は30名に改訂することを計画した。一般に、研究科の規模は教官数ではなく学生定員数によって決まる。従って、学生定員数を増やすことによって研究科の規模の拡大を計るとともに、何よりも学生に対する奨学金の割当数を増やすことになった。経済的に保証される目処が立てば、多くの優秀な学生が大学院に進学することが期待でき、これによって研究の活性化を計ることができる。

次に、環境計画科学専攻は発足時から幅

広い研究分野を包括しているの、この際、二つの専攻に発展的に分割したいと考えた。一つは自然環境のフィールド領域を対象とする「生物圏環境学専攻」、もう一つは環境技術開発の基礎科学領域を対象とする「環境調和物質学専攻」である。これまで環境対策と言えば、排煙処理や排水処理など発生した廃棄物を生産後に処理する、末端処理技術が中心であったが、これからは生産しつつ環境保全が達成できるようなクリーナープロダクション対策として環境にやさしい材料や技術を開発すると同時に省エネルギー対策を考えることが必要である。

以上の観点に立つてまとめた改組案を実現するために、鋭意努力したが、その後、自然科学系大学院の重点化構想が学内に浮上したことにより、この改組案は中断されることになった。

〈インターファカルティを目指して〉

このように、研究科の研究・教育体制の整備充実を計ることも必要ではあるが、それにも増して重要な事は、現在の体制下で研究科の充実を計るために、言い替えば、研究科の足腰をより強くするために、我々教官が如何なる問題に取り組むべきかということである。記念冊子に見られる学長はじめ両学部長からの祝辞の中に「インターファカルティ」という言葉が共通したキーワードとして注目される。これは我々研究科の組織の特徴を表す重要な言葉の一つであり、煙突型の研究科には当てはまらない言葉である。10年を経た今日、インターファカルティの機能を十分に活用した教育効果と研究実績を上げることができただろうか。10年の節目の年にこの問題について検証する必要がある。丁度数日前に教育研究活動に関する外部評価の冊子が教官に配布された。その中で評価委員から「異な

過去5年間の就職を振り返って

藤井博信 (前就職委員長)

就職難と言われ始めて早くも6年目を迎えた。就職戦線は、多少好転してきているようであるが、企業の持つ構造的欠陥から来た不況だけに、就職難は今後も続く。このような時代に、諸君が就職戦線を勝ち抜くには、早めの準備(進路決定・勉強・対策)を進める事が極めて重要となる。

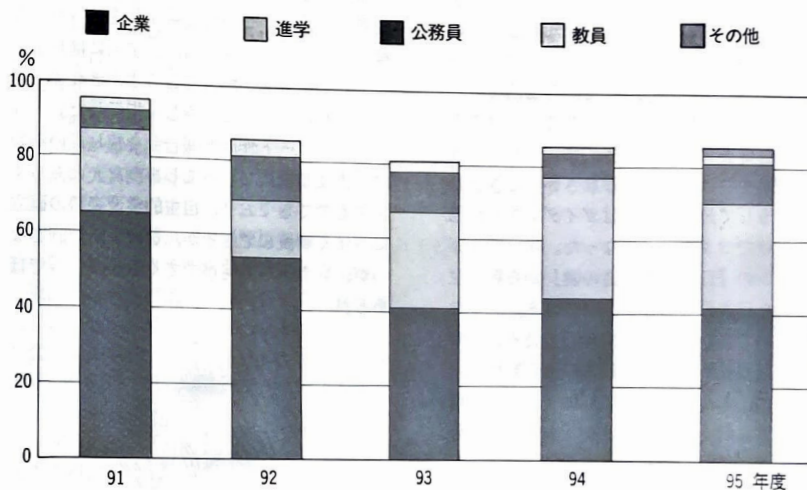
まず、平成7年度の就職状況を振り返ってみる。全卒業生数は177名であった。そのうち就職者は95名、大学院進学者46名で、いわゆる就職率は85%であった。強いて言えば、総合科学部では、女性の方が就職率は若干良い。就職先等の詳細は別の機会にゆずるとして、ここでは過去5年間の就職状況を追ってみよう。

図には、1991年から1995年までの分野別就職率をまとめてある。就職率は、1993年が最低で、その後飽和傾向にあり、毎年15%程度の就職未定者が出ている。これを打破するには、できるだけ早い時期に学生自身が就職状況の実態を把握し、自覚を持って就職に立ち向かう事を期待するしかない。最近の傾向と

して言える事は、企業への就職者が減り、大学院への進学や公務員への就職者が増えている。これはまさに構造不況の現れである。今後とも、しばらくはこの傾向が続くと予想され、基礎的な学問をしっかり身につけておく事が必要である。学生諸君の奮起を促したい。

図から判るように、ここ2~3年、15%近くの学生が就職しないまま卒業している。こうした学生は公務員志望者が大半であるが、現在どうしているのだろうか、足どりのつかめない卒業生が多い。就職委員会としては気がかりである。今後、就職が決まったら、直ちに、総合科学部学生係(電話:0824-24-6319)へご連絡頂ける事を期待しています。

卒業生進路一覽



10年を経た今日、インターファカルティの機能を十分に活用した教育効果と研究実績を上げることができただろうか。

る学部を基礎とする研究科の特色を生かすべく、いろいろな教育研究分野の研究者を集めたユニークな研究プロジェクトを組織していく必要もある。」という指摘を受けている。インターファカルティ機能を生かした教育研究の推進はシンポジウムのテーマである「21世紀に向けて生物圏科学研究科が目指すもの」の重要な課題の一つであると考えている。

講演の後に行われたパネルディスカッションでは、インターファカルティ機能を生かした教育と研究について討論が行われた。教育に関しては、研究科が発足した当初は集中講義方式で教官が相手学部へ赴いて特定の授業科目のみを開講してきたが、新キャンパスへ移転後は両学部で開講されているすべての授

業をそれぞれの学部の院生が自由に選択して受講できるようになった。授業科目に対する両学部からの聴講学生数は過去3年間のデータからみて妥当な分布を示している。しかし、授業内容については専攻会議などの場で討議して調整を計り、斬新な講義を提供していくことが必要であろう。博士学位の審査には積極的に両学部から教官が参加するよう配慮することが望ましい。研究に関しては、両学部の教官で研究プロジェクトを安易に組織しても、研究費を獲得するための虚偽組織に過ぎない。研究プロジェクトはそれぞれの分野で研究活動を通して実績を挙げている教官が自然体で構成したものでなければ、真のインターファカルティ効果を発揮できないであろう。

(注)

広島大学には総合科学部を含めて11の学部と10の大学院研究科があります。総合科学部の理系の多くの教官は生物圏科学研究科の、文系の多くの教官は社会科学研究科の、一部の教官は理学研究科、工学研究科、国際協力研究科の担当をしております。生物圏科学研究科は、生物圏(生物とそれを取り巻く気圏、水圏、地圏の総合体であり、生物の生存の場を表す)の中で人類が安定して豊かな生活を営むために、広い視点から生物圏の危機に対処できる高度な技術者・研究者を養成するために1985年に設立されました。生物圏科学研究科は総合科学部と生物生産学部および工学部の教官によって現在構成されており、環境計画科学、生物機能科学、生物生産学の3つの専攻があり、環境問題の総合的・基礎的研究、環境の計画的な管理と開発、生物と環境の関係、生物機能の開発と利用、生物の有効な利用と管理、生産機能等の研究が行われています。平成7年度の総合科学部理系コースの卒業生の32%が生物圏科学研究科に進学をしています。大学院は総合科学部と異なる部局ですが、大学院の整備は総合科学部における教育・研究と密接に関係しています。

教養ゼミを担当してみても

石倉 康次 (社会科学コース助教授)

「新入生の中には、受動的学習に慣らされてしまい、自主性を重んじる大学での学習を進めるのに不安を感じている学生も少なくない。教養ゼミは、身近なテーマを討議しながら、また実習・体験を通して、大学における学習の仕方を学ばせることに力点を置いたゼミであり、読解力や文章構成力、発表力、討論の方法を積極的に身に付けさせ、学問の世界を共有できる学生を育てることを目的としている」。昨年秋に作成された「教養ゼミ実施案」にはこう書かれていた。この主旨には概ね賛成できる。実際、私の研究室に相談に訪れる総合科学部生には、この学部に属していることのアイデンティティーが掘めずにいるものが多く、大学生としての学習の仕方や学習の意味を3年生になってようやく気づくようになったが、4年生次の就職活動が厳しく、十分納得のいく学習ができないまま卒業してしまうのではないかと不安だ、と告白した3年生もいるからである。

私が担当する教養ゼミは「日本社会の特殊性と普遍性」をテーマとするもので12名の学生がいる。最初の時間に互いを知り合うために自己紹介を行った。ところが学生は自分の名前しか言わない。私は「自分の名前を言うだけでは相手に自分を紹介したことにはならない。自分を少しでも具体的に理解してもらえ何かをつけ加えて話さない」と強調した。こうして最初の時間はガイダンスと自己紹介だけでつぶすことになった。次いでウォルフレンの『日本権力構造の謎』から新入生に身近な日本の学歴社会、マスコミ、文化などについて書かれた章を抜粋して読み合わせをした。ウォルフレンは日本の教育制度では「自発的に考え、自発的に行動することはほぼ組織的に抑えられる」とか「人材選抜以外の学校の機能はどこかに忘れ去られた」「日本の典型的な子育てでは、世の中はどう機能するかという普遍的成り立ちを教えるのではなく・・・たいいの場合、子供は母親の顔

色を見て善悪を見分けるようなる」などと述べている。ゼミではこれらについて討論しようとした。しかし、感想は述べても「腹が立つ」というような感情的反発以外に意見らしいものは出ず、3週とも討論にならなかった。そこで大学院生のアイデアに頼り「たけしのテレビタックル」の「一芸入試の是非」をテーマにしたディベートの録画をみせ討論をする時間を設けた。この時間はさすがに全員賛否いずれかの立場から意見を述べた。しかし討論は混線したまま終わった。次の週に議論が混線した原因は言葉の定義と論点整理をしなかった点にあることを確認した。引き続き、学生の視野を広げるため留学生(岳君とヒロセさん)に日本社会と日本人について話してもらう時間を設けた。話を聞く際に学生が全くメモを取っていないことに私は驚いていたが、留学生の報告は「知っておくべき大切な話だった」と学生に言わせるほど感動的なもので熱心に質疑が行われた。この後のゼミでは、レポートにして深めたいテーマと論点、依拠する資料、予想される結論などを各自提出し、コンピューターを使った文献検索法を学ぶ学習を行った。学生にはレポートと作文の違いが解っておらず大きなテーマを設定しがちでその手直しを指示した。

まだレポート作成と報告会を残しているのに「大変な授業を取ってしまった」ともらす学生もでてきており、自主的学習姿勢の確立にうまく橋渡しできるか、なお予断を許さないが、レポートで何がでてくるか楽しみではある。



日はまた昇る?

CHOBA B3OЙДEТ СОЛНЦЕ?

井上 研二 (外国語コース教授)



大学でロシア語を選択する学生がここ2、3年激減している。専門科目を受講する学生数は今も昔もそう変わらないが、初歩のロシア語(現在のカリキュラムで言う「ロシア語A」や「ロシア語B」を指す)の受講生が1クラス10人を割るクラスも出てきたのである。ソ連時代末期、ゴルバチョフが国内でペレストロイカを推進し、対外的には「新思考外交」を展開して「ゴルビー・ブーム」を巻き起こした頃には1クラス90人前後もいるクラスがいくつもあったことを思い起こすと、まさに隔世の感がある。お陰で文部省が奨励する「少人数教育」を率先して、模範的な授業を行っているが、果たしてこれで正常なのであろうか。ロシア語は日本人にとって必ずしもやさしい外国語とは言えず、したがって「簡単に単位を貰える」科目では決してない。それゆえ、学生達がロシア語を敬遠するのであろうか?ここ数年におけるロシア語の人気離れ現象は広島大学に限らず、日本のどの大学にも共通する現象なのである。英語を除くドイツ語などの西欧語も人気離れし、代わって中国語が爆発的に人気を集めているという。7年前の天安門事件の直後は中国語の人気は急落したことを思い出すと、やはり外国語を学ぶ動機はその時点での国際情勢やその国の持つ魅力度に大きく左右されるようである。

東欧の冷戦が終結し、ソ連型社会主義は敗北した。しかし私が学生だった30数年前は、社会主義や共産主義に夢を託し、その実験を世界に先駆けて行っていたソ連に憧れを抱く者も少なからずいた。そうした動機からロシア・ソ連の歴史、政治、経済、社会などを研究する目的でロシア語を学ぶ者も多かった。

また社会主義や共産主義は嫌いで、ソ連という国も好きではないが、19世紀ロシアが輩

出したトルストイ、ドストエフスキー、チェーホフなどの偉大な作家に惹かれて、その作品を原語で読んでみようとか、さらには研究してみようという学生が少なくなかった。

しかし、ここ数年こうした学生がめっきり減ってしまった。スターリンの恐怖政治はおろか、レーニンの名前さえ知らない学生がいる状況である。

ソ連解体後のロシアは超大国の座から滑り落ち、かつての西側先進諸国から経済的、技術的支援を受ける2流国となってしまった。議会の武力鎮圧(93年10月)やチェチェンへの軍事侵攻などエリツィンの強権的体質はすっかり改革者としてのイメージを払拭してしまった。わが国におけるロシア語離れの原因は、極言すればこの「エリツィン」にあるとさえ考えている。

日露間には依然として北方領土問題が残っており、平和条約も結ばれないままである。しかし環日本海沿岸を中心とする日露間の貿易や民間レベルの交流は活発化しており、隣国ロシアとの関係は中、長期的に見れば、その重要度がいっそう高まるだろうと考えている。ロシア人の知力・体力は極めて優れており、科学、軍事分野でも、芸術等の精神文化の分野でも、スポーツの分野でも、世界最高水準を維持し続けてきた。近い将来、再びロシアが世界1、2の地位にのし上がり、魅力的な国となって、ロシア語ブームが到来することを期待する昨今である。





どうせこの世は、そんなとこ

柏戸 義道 (事務長補佐)

悩み多き学生諸君へ「一処方箋」を一筆進呈することにする。多少抹茶臭いところは辛抱願いたい。

賀茂郡大和町の人里離れた山奥に棲真寺という禅宗の古刹がある。あたりは深山幽谷であるが、紫陽花の時期や名月の折の境内は、花もよし、月もよし、得も言われぬ静寂三昧に浸れるため、時折、里人が訪れる。諸君が生まれる前のことであるが、小生、高三の夏休みの四十日間、受験準備のためこの寺に籠った。最寄りのバス停から山道を4キロ、まさに「分け入っても分け入っても青い山」(山頭火)で、寺に着く前に里心がついた。和尚は古希を過ぎ、視力を失われていた。

尼僧の奥様によれば、生来の話好きながら、里へも下りられず、話相手不足を託っておられたという。

そんな訳で大歓迎を受け、その日から日没とともに和尚が庫裏とを結ぶ半月橋を渡って本堂の小生のもとへ話しに来られた。話題は主として修行時代の昔話で、いわば肩の凝らぬ仏教講話であり、小生は専ら聞き役であった。ランプの灯の下でのこのアラビアンナイトならぬ「棲真寺ナイト」は、寺を去る日まで「休講」は無かった。その中の一つを記憶の糸を手繰りつつ、ご参考までにご披露する。

「柏戸さん、四苦八苦と言いますじゃろう…。四苦とはの、人間は生身の体じゃから、生みの苦しみに始まって、病み、老い、死ぬ苦があり、これが「四苦」じゃ。さらに、人間には心があるが故に、また別の苦が生ずる。その一つは「愛別離苦」(あいべつりく)と言うての、親から始まって、どんなに愛する人とも必ず別れにゃならん苦じゃ。次が「怨憎会苦」(おんぞうえく)で、嫌な奴とも、会いとうない人とも会わにゃあならん苦じゃ。そのまた次が「求不得苦」(ぐふとつく)と言うて、求めても得られん苦じゃ…金か、地位か、あるいは、愛であるかは別としての…。おしまいが「五蘊盛苦」(ごうんせいく)と言うて、字も難しいが意味も難しいんじや

て…。まあ、一言で言う、「五蘊」は身体と精神の両方じゃと思えばよからうて…。

つまり、人間、身体と精神が成長するとき、時には粗暴になったり、色々苦が伴うようですよ…。

中には親に手をかけるようなバチあたりも居るが、これもその類じゃろう…。はじめに言うた生・病・老・死に、愛別離苦、怨憎会苦、求不得苦、五蘊盛苦を加えて「四苦八苦」なのじゃ。生きとる限り、生・病・老・死は避けられんし、また、「煩惱の犬、追えど去り止まず」と言うように、次から次へと悩みや苦が付き纏うのがこの世で、難儀なことじゃ。特に失恋などは求不得苦に加えて愛別離苦、それにライバルが職場の同僚であったりすれば、怨憎会苦にまで一度に苛まれるのじゃから、たまらんじゃろう。わしは経験がないが、あんたは、あれ(奥様)の話じゃあ、たいそう美男子じゃそうじゃから気をつけんさいよ。女の方で放っときませんでのお…ワツハツハツハ。

ええかの、そういうときにゃあ、シャカリキ、負けん気を出して「対峙」せん方がよらしいのじゃ。対峙すればするほど、その悩みや苦を強う意識するが故に、我と我が手でそれを大きゅうし、益々しつこいものにする。

それより、「ああ、来た、来た、辛いのお…」と、素直に苦を認めることじゃて…。所詮、逃れられぬものなら、あるがままを受け入れ、諦めきって、苦と一つになることじゃ。難しいことじゃが、その方がえてして早う悩みや苦は去るもんじやと、わしらは教えられてきた。偉い和尚が「病むときは病むがよろしかろう、死ぬときは死ぬがよろしかろう」と言うておる。なかなか、そうは行かぬが、まあ、知っとくべきでしょうて。やれ、邪魔をしましたのお。ごゆるくらとおやすみなされ。」

小生、寺で何を勉強したかは全部忘れたが、和尚の話は不思議と、全部覚えてる。

おしまい

江田島に行ってきました

竹本 佳代 (教養教務係)

去る5月28日から30日の間、初任者研修で江田島の国立江田島青年の家に行ってきました。

28日に東千田の本部に集合し、初めて同期が一同に会しました。24名と人数は非常に多く、うち15名が女性という構成です。開講式で同期の横のつながりの強化が大きな目的の一つと聞き、初めての研修で不安や緊張がありました。最初は、ほっと一安心です。

続いて講義が行われました。春まで広島大学の学生だったため、4月から学生→職員と立場が変わったもののいま一つ変化のない生活に2か月がたとうというのに公務員、社会人になったという実感があまりなかったのですが、講義を聞いているうちに職員になったんだという実感がしみじみわいてきました。

江田島には午後から移動しました。チャーター船で江田島の棧橋に到着し、約15分の厳しいアップダウンの坂道にスーツにスポーツバッグといういでたちで臨みました。青年の家に到着した頃には息は上がり、足はがくがくです。疲れた顔での記念撮影となりました。

夜には懇親会がありました。真面目なだけの研修かと思っていたのですが、上の人を交えビールと料理を囲んでの和やかな雰囲気、色々昔話を聞いたり、同期の人たちと話をすることができ、少し仲良くなることができました。

2日目はほとんどが講義で、朝から大学についてや公務員のあり方などについての講義をみっちり受けました。

3日目はお待ちかねのカッター研修です。出発前、色々な方に研修の話をして伺ったところ、皆さん様に江田島→カッター→厳しいというお話で、また青年の家や講師の方々もカッターという言葉が話の中で口にされるので、江田島といえばカッター、カッターといえば超厳しいという感じを受けました。雨女である私は雨で中止になるだろうと楽観視

していましたが、話では雨天決行ということでした。案の定…2日目に続き3日目も雨でした。羽羽を来て訓練場まで二列で行進していくと、噂の怖い教官がおられました。結構強い雨の中ぬれながら気合の入った大きな声で「声が小さい!もう一度!」「遅い!」「集合が悪い!3秒でしろ!」などと次々に喝を入れられ、どうしよう…と少々肝を冷てしまいましたが、案外体育会系のノリで懐かしいものがありました。

いよいよ海の上に出ると、やはり緊張します。そおれとかけ声を掛けながら2人でオール1本、12本のオールをみんなで漕いで進みますが、8kgあるというオールは重く、なかなかいうことを聞いてくれません。ともすると波にオールを取られそうになり、腕はだんだん重くなり…四苦八苦です。やっとコツがつかめてきたかなという頃、カッターは棧橋に戻ってしまいました。ずぶ濡れになりましたが、雨のせいで予定よりも早く終わり、思ったほどきつなく、結構楽しいものでした。曇りだったら、宮島までのコースにトライしてもいいかな…と思えるのは今だからでしょうか…。

研修は残り一つの講義を済ませ、無事に閉講式を迎えました。この研修で、久しぶりの団体生活に戸惑いながらも同期の人と仲良くなることができ、また多くのことを学ぶことができ、非常に充実した3日間でした。



前列左から4人目が竹本さん

就職活動奮闘記

武田 淳子 (物質生命科学コース4年)

◆理系女子も大変

「自分の専門を活かし、自分のやりたい事をした」。私は物生コースの4年で有機化学が専門なので、研究職を探していました。

化学品業界はまだ景気が悪く、どこの会社の募集人数も5~10人と少なめで、募集していないところもたくさんありました。私は資料請求ハガキは3月までに60枚くらい書きましたが、半分くらいしか返ってきません。特に医薬品会社からはノーアクションか、採用無しのお返事が届くかどちらかでした。つまり医薬品の研究職を希望するなら、せめてマスターは出ておけということです。でもおかしいですね。マスター出たら、女子は不利だと言うし、4大卒では技術水準が低いと言われて、私たち理系女子に一体どうしろと言うのでしょうか。

●私のやりたいこと

さて私は、化粧品にとても興味がありまして、本当に安全な化粧品とは何か、色々考えてきました。「この化粧品は安全だと言われているけど、肌にあわないわ。」という声をよく聞きます。万人に合う化粧品がほしい、私はそう思うようになっていました。そういう訳で、私は化粧品会社を中心に就職活動をしてゆきました。幸い化粧品会社は4大女子を差別せず採って下さるので、ある意味、嫌な思いをせずにここまで来れたと思います。

▲面接失敗談

コンセプトは十分だった私ですが、面接では失敗の連続です。ある社で「F社(第一志望)と、うちと両方受かったらどちらに行きますか」と聞かれ、返答に詰まってしまったこともありました。「第一志望の御社に入りたいと思っております」といけしゃあしゃあと答えれば良いのですが、これがなかなか言えないんです。それから、初めての面接(4月上旬)では、「自己アピールを1分間でして下さい」と言われ、しどろもどろに答え、結局は総料のアピールをしていたという結果に終わってしまい、とても悲しい思いをしました。というわけで、就職予定の3年生の皆さんは、自己アピールと、志望動機くらいは返答をしっかりと用意しておきましょう。でも丸暗記はダメです。

★悟り開くなハガキ出世

このように失敗をしていると、当然の事な

から何社かから不合格通知が届きます。そうすると、持ち駒が少なくなり、だんだん不安になって行きます。「やはり研究職は無理なんだなあ」と自分を納得させるために、悟りにいた境地にはいります。でも、就職活動は続けるのです。この時期が一番辛いです。化粧品会社も2社しか残っておらず、他の会社はそこまで興味が無いけれど一応受験するという状況です。(考えただけで崖っぷちでしょう。)そして、妥協が入るのもこの時期です。「営業も面白いかな」とか「マーケティングもいいな」とか「自分は研究職より外回りの方が合ってるかな」と、完全な弱気です。こんな事なら、3月頃までに、自分のやりたい業種の企業を徹底的に調べ上げ、もれなく資料請求ハガキを出すべきでした。就職活動は後になって後悔する事が多いようです。

●人物種多様性へ

就職活動をしていて気づいた事は、企業側がかなり人物重視であるということです。それはある意味いい事です。しかし、「明るくて積極的な人がよい」とどの企業も言われますが、私はそういう考え方には賛成できません。営業などはそうなるのも仕方ありませんが、他の部署に関しては、暗い人でも、内気な人でも、多種多様な人がいる方がうまくいくと思います。そして、自分のやる気をくみ取って頂ける企業には入りたいと思っています。せめてこの飛翔が出る頃には就職先が決まっていって欲しいものです。

3年生の皆さんはこれから就職活動される方が多いと思われるので、早めの行動を心がけ、内定を勝ち取って下さい。



西条の未来

阿戸 慎一 (1年)

私の住むところは、はっきり言って田舎だ。自転車通学生の私にとっては、スーパーに行くのにも一苦労する。また、夏になると、夜、たくさん小さな虫が家の網戸をうめつくす。いったん、洗濯物を取り込むのを忘れようものなら、朝取り込む時には、洗濯物にはりついた虫を一生懸命取り除かなければならない。何度引越そうと思ったことか。そのたびに、お金をためる、車を買うまでの我慢だと自分に言い聞かせたものである。田舎に住んでいることもあり、田舎の良さも分かっているはずの私であったが、ここで一人暮らしのせいで、すっかり田舎が嫌いになっていた。そんな私が、MUSEという街づくり委員会に入ったのも、そうした不満からであった。遊び施設がない、ならば作ればよい、西条は田舎だ、ならばこれから都市化させてゆけばいいのだと考えていた当時の私は、数年間で状況がガラリと変化するとは思えないが、ぜひそうしたことに自らが少しでも協力できれば、と思っていたのである。

さて、入って一か月が経ったころであろうか。いつものように暗い夜の道を走っていた私は、自転車のかごをふと見て驚いた。かごのへりのごくあるわずかな部分が、光ったり消えたりしていたのである。もしやと思い、街灯の下でその光りの正体を探った。ホタルであった。後で人に聞いたところ、西条ではホタルはよく見かけるとのことであったが、

ここ数年、生のホタルに出会わなかった私は、心の底から感動した(本当に)。自然のすばらしさというものを久しぶりに感じた。忘れていた、田舎の良さというものが私の心の中に戻ってきたような気がした。単純な私の心の中は感動でいっぱいであった。

自宅に帰ると、自分の心の中に急に矛盾が生じるのを感じた。「西条の都市化」の願いと、「西条がいつまでもホタルの住む自然のある町であり続けてほしい」との思いである。

私は思った。「西条は数十年後には、きっと立派な学生街になっていることであろう、しかし、そうした西条の都市化は、ホタルを減少させてしまうことにはならないだろうか?」「そもそも自分は『西条の都市化』を夢見て、そして協力しているのだし、虫が飛んでくるような生活環境を嫌がっていたではないか。そうした自分が自然を守れ、などと言えるのか?」「いや、西条が真の学生街になること=都市化や、都市化=自然破壊という見方が間違っているのではないか?」etc...

みなさんも、西条の未来について、少し考えてみてはいかがだろうか。今は西条はまだ田んぼばかりの田舎である。しかし、数十年後、田んぼが次々と家や道路に姿を変え、ホタルが見られなくなることを想像すると…。だが安易なエコロジー論を唱えることは、今の西条に限っていえば、「百害あって一利なし」だと、私は思う。



西条虫拡大の図

注)何の生物学的裏付けも無い図です

